

海辺にて

ざざん、ざざんと緩やかな海風とともに流れてくる波の音が鼓膜を揺らす。艦とは言いつつも水辺とは離れた暮らしをしていたドクターからすればその音は珍しく、そろそろと素足を浸せば寄せては返す波とともに足元の砂が崩れていく感覚が新鮮でわわ、と思わず声をあげた。

くすぐったくも心地よい感覚に身を任せていれば、砂浜を踏みしめる音が近づいてきて深々としたため息とおもむろに体が浮いた。どうやらお迎えが来てしまったらしい。

「体を冷やすなと言っただろう」

深々とため息をつく人の顔にはそのため息と同じぐらい深い皺が眉間に寄っているものだから、ドクターは抱き上げられた逞しい腕の中で笑声を上げた。

「せっかく海に来ているのだから少しは見逃してくれない

か、ウルピアヌス」

「前にもそういつて勝手に泳いだあげく、熱を出して俺に看病させた事を忘れたか。自分の脆弱さを忘れる程度にはその頭は優秀なようだな」

辛辣かつ心底呆れたといった様子なのに抱き止める腕の強さが変わらないのがなんともこの人らしい。言葉や態度で誤解されがちなので、本当のところは情深く優しい人であることを知っている。——そうでなければここに二人きりではないから。

「食事ができている。戻るぞ」

有無を言わずに滞在先に向かう人の腕の中でドクターは頷いた。ちらりとした一瞥とともにさらりと一つ頭を撫でる手が心地よい。

——万物を統べる者が本当にいるのなら、今日に蔓延る災禍の元凶として、首を差し出してもらわねばな。